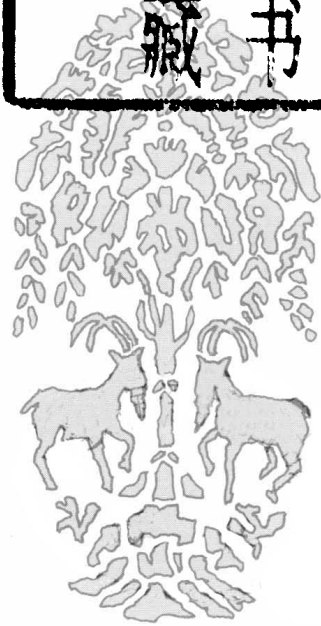
源氏物語 五

阿部秋生
今井源衛
秋山虔
鈴木日出男
校注・訳

邹秋 ·訳

江苏工业学院图书馆
藏书章



小学館

完訳 日本の古典 第十八巻 源氏物語(五)

一九八九年四月一日 初版第二刷発行

校注・訳者 阿部秋生 秋山 虔 今井源衛 鈴木日出男

発行者 相賀徹夫
印刷所 凸版印刷株式会社
発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋二―三―一
振替口座 東京八―二〇〇番
電話 編集 (〇三) 二三〇―五一四一 業務 (〇三) 二三〇―五三三三 販売 (〇三) 二三〇―五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

© A.Abe K.Akiyama G.Imai H.Suzuki 1985 (著者検印は省略いたしました)

ISBN4-09-556018-5

目次

凡例……三

原文　現代語訳

蛍……一一……二三七
常夏……三五……二五二
篝火……六一……二六八
野分……六七……二七一
行幸……八九……二八四
藤袴……一二一……三〇四
真木柱……一三九……三一五
梅枝……一八三……三四四
藤裏葉……二〇五……三五九

校訂付記……三三〇
巻末評論……三七九
付　録
引歌一覧……三九五
各巻の系図……四一五
官位相当表……四二四
図　録……四二六

口絵目次

源氏物語図扇面／常夏・篝火……1
源氏物語図屏風……2
源氏物語梅枝図色紙……4

〈装丁〉　中野　博之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、本書の本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（平安博物館所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したものである。河内本・別本の本文は参考として掲げるにとどめた。

一、第五冊（蛍～藤裏葉）の底本として野分の巻には定家本（天理図書館所蔵）を用いた。その他の巻には大島本を用いた。各巻に使用した底本・校訂諸本は、「校訂付記」の巻名の下に略号によって列挙した。

一、本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的仮名づかいに改めることをはじめ、次のような操作を加えた。

1　段落を分けて改行し、大きい段落には番号と見出しを加えた。また句読を切り、濁点を加え、会話などを「　」でくくり、肩書を付した。

2　宛字（あてじ）は普通の表記に戻し、補助動詞の「たまふ」「はべり」「きこゆ」「たてまつる」などは、仮名書きに統一した。これらのほかにも仮名書きにしたものがある。

○大正し→大床子（だいしやうじ）　外尺→外戚（げさく）　五→碁（ご）　木丁→几帳　本上→本性（ほんじやう）　せふ正→摂政（せふしやう）　あか月→暁

○思給る→思ひ(う)たまふ(へ)る　侍なり→はべなり・はべるなり　也→なり

○猶・尚→なほ　中〳〵→なかなか

3　「〳〵」「ゝ」などの繰返し記号は用いず、文字を繰り返して表記した。また、「〳〵」「ゝ」を「々」に改めたものもある。

○つゝ→つつ　やう〳〵→やうやう

○日ゝ→日々　人〳〵→人々　御方〳〵→御方々

4　漢語の韻尾のm・n音の区別は決定しがたいところもあるので、原則的にはn音（「ん」表記）に統一したが、例外もある。

○三位（サンミ）　散位（サンニ）　汗衫　竜胆（または「りうたむ」）

5　底本に二通りの表記がある同語は、底本の形にしたがった。

○かるし—かろし（軽し）　かぞふ—かずふ（数ふ）　うまる—むまる（生まる）　うめ—むめ（梅）

まな—まんな—まむな（真字）　ん—む（助動詞）　なん—なむ（助詞）　なめり—なむめり—なんめり　ついしよう—ついそう（追従）　こきでん—こうきでん（弘徽殿）　じようきやうでん—そきやうでん（承香殿）　おほいどの—おほとの（大殿）

一、底本を校訂した部分は、「校訂付記」に掲げ、校訂の拠りどころとした諸本の略号を記した。

一、各帖の本文冒頭にある巻名は、底本の題簽の文字を活字体になおして用いた。

一、脚注については、日本古典文学全集『源氏物語』の注をふまえてもいるが、なお次のような配慮のもとに執筆した。

1　簡潔・明快であることを旨とし、なおかつ脚注だけで十分本文が読解できるように心がけた。

2　本文の見開きごとに注番号を通して付け、その注釈は見開き内に収めるように心がけた。だが、スペースの関係で、時には前のページあるいは後のページの注を参照するよう、→を付してページと注番号を示した。

3　『源氏物語一～四』（第一冊～第四冊）を参照すべきことを示す場合は、次のようにした。

○→帚木[1]四九ページ（本文を参照する場合）　→紅葉賀[2]五七ページ注三（脚注を参照する場合）

→須磨[3]〔一四〕（本文中の太字見出しの章段を参照する場合）

4　語釈は、スペースの許すかぎり、語義・語感・語法・文脈・物語の構成・当時の社会通念などにもふれながら、読解・鑑賞の資となるよう心がけた。

5　段落全体にわたる問題、とくに鑑賞・批判などには、◈を付して記した。

6　引歌がある部分の注は、当該引歌とその歌が収録されている作品および作者とをあげるにとどめ、引歌の現代語訳と解説とは、巻末付録「引歌一覧」に掲げた。

7　登場人物・官職・有職故実については、本文の読解・鑑賞に必要な範囲内にとどめたので、巻末付録の「系図」「官位相当表」「図録」をも併せて参照されたい。

一、現代語訳については、次のような配慮のもとに執筆した。

1　原文に即して訳すことを原則としたが、また独立した現代文としても味わい得るようにつとめた。

2　そのために、必要に応じて、(1)主語・述語の補充、(2)語順の変更、(3)会話・独白（モノローグ）・心内語・引用における「　」の添加、(4)文中の言いさしの言葉には下に補いの言葉の付加などの工夫をした。

3　和歌は、全文を引用したのち、その現代語訳を（　）内に示した。

4　見出しは、本文に付したのと同じ見出しを現代語訳の該当箇所に付けた。
5　原文と現代語訳との照合の検索の便をはかり、それぞれ数ページおきの下段に、対応するページ数を示した。

一、巻末評論は、本巻所収の巻々に関連して問題となるテーマを一つとりあげて論じた。
一、巻末付録として、「引歌一覧」「各巻の系図」「官位相当表」「図録」を収めた。
一、本巻の執筆にあたっての分担は、次のとおりである。
1　本文は、阿部秋生が担当した。
2　脚注は、秋山虔と鈴木日出男が執筆した。
3　現代語訳は、秋山虔が執筆した。
4　巻末評論は、今井源衛が執筆した。
5　付録の「引歌一覧」は、鈴木日出男が執筆した。

一、その他
1　口絵の構成・選定・図版解説については田口栄一氏を煩わした。
2　口絵に掲載した『源氏物語図扇面』については浄土寺の、『源氏物語図色紙』については京都国立博物館の協力を得た。

源氏物語

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

蛍（ほたる）

巻名　源氏が蛍を放って玉鬘の容姿を蛍兵部卿宮に見せたことによる。また玉鬘の歌に、「声はせで身をのみこがす蛍こそいふよりまさる思ひなるらめ」がある。

梗概　源氏の意外な態度に、玉鬘の困惑は一通りではなかった。源氏は玉鬘への抑えがたい恋情を抱くいっぽうで、彼女に兵部卿宮との交際を勧めたりもする。宮の求婚者としての態度に好感を寄せてのことであったが、玉鬘も源氏の懸想のわずらわしさから、求婚者の中では宮を憎からず思うようになっていた。宮が玉鬘を訪れた五月雨の晩、源氏は頃合いを見計らって玉鬘の身辺に蛍を放ち、そのほのかな光の中に彼女の姿を映し出させた。はたして宮は玉鬘への思いをますますつのらせるのであった。

五月五日の端午の節句には、花散里の夏の御殿の馬場で競射が行われた。その夜源氏は花散里のもとに泊ったが、二人の仲はすでに共寝をすることもない、枯れ落ち着いたものであった。

長雨の期間が例年よりも長く、六条院の女性たちはそれぞれ絵や物語に無聊を慰めていた。なかでも田舎育ちの玉鬘は物語に新鮮な興味をおぼえ、住吉の姫君の物語にわが身の上を引き比べてみたりもする。そんな玉鬘を相手に源氏は物語の本質を論じ、ついで紫の上には、明石の姫君への教育的配慮を意識しながら物語の功罪を論じた。

源氏は、夕霧を紫の上からは注意深く遠ざけていたが、明石の姫君とは親しい間柄にと配慮して、その遊び相手を任せていた。夕霧はそれにつけても雲居雁が忘れられないが、といって身を屈する気持にはなれないのである。

内大臣は、自分の娘たちが期待どおりにはならぬ不運を嘆き、玉鬘をそれとも知らぬままに、昔夕顔との間にできた遺児を捜し出すべく、夢占いをさせたりもするのであった。

〈源氏三十六歳の夏五月〉

ほたる

[一] 源氏の懸想ゆえに、玉鬘大いに困惑する

今はかく重々しきほどに、よろづのどやかに思ししづめたる御ありさまなれば、頼みきこえさせたまへる人々、さまざまにつけて、みな思ふさまに定まり、ただよはしからで、あらまほしくて過ぐしたまふ。

対の姫君こそ、いとほしく、思ひのほかなる思ひ添ひて、いかにせむと思し乱るめれ。かの監がうかりしさまにはなずらふべきけはひならねど、かかる筋に、かけても人の思ひよりきこゆべきことならねば、心ひとつに思しつつ、さま異に疎ましと思ひきこえたまふ。何ごとをも思し知りにたる御齢なれば、とざまかうざまに思し集めつつ、母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとり返し惜しく悲しくおぼゆ。

大臣も、うち出でそめたまひては、なかなか苦しく思せど、人目を憚りたま

◈胡蝶巻の晩春から、五月雨のころの夏へと移る。

一　源氏の、太政大臣（少女④一〇五ページで就任）としての重々しさ。

二　太政大臣は閑暇な職。また往年のような忍び歩きもしない。

三　源氏を頼りとする六条院や二条東院の女君たち。

四　不安もなく、申し分ない生活。

五　西の対の姫君。玉鬘。

六　気の毒にも。語り手の評。

七　養父からの懸想をさす。→胡蝶④二三二ページ七行。「添ひて」は、流浪を経験したうえに、の気持。

八　→玉鬘④〔四〕。田舎人の懸想を引合いに、養父の恋を軽く揶揄。

九　度重なる源氏の求愛を暗示。

一〇　成長とともに女の身の処しがたさが分る。前には、年齢のわりに男女関係に疎遠で無知、とあった。→胡蝶④二三二ページ五行。

一一　養父をも実父をも頼りがたい気持から亡き母夕顔を追慕。

一二　玉鬘への恋慕を。「色に出でたまひて後は」（胡蝶④二三三ページ）。

一三　心が慰まるどころか、かえって。→胡蝶④二三一ページ八行。

ひつつ、はかなきことをもえ聞こえたまはず、苦しくも思さるるままに、繁く渡りたまひつつ、御前の人遠くのどやかなるをりは、ただならず気色ばみきこえたまふごとに、胸つぶれつつ、けざやかにはしたなく聞こゆべきにはあらねば、ただ見知らぬさまにもてなしきこえたまふ。人ざまのわららかにけ近くものしたまへば、いたくまめだち、心したまへど、なほをかしく愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり。

〔三〕蛍宮焦慮　源氏、女房に返事を書かせる

兵部卿宮などは、まめやかに責めきこえたまふ。御労のほどはいくばくならぬに、五月雨になりぬる愁へをしたまひて、蛍宮「すこしけ近きほどをだにゆるしたまはば。思ふことをも片はしはるけてしがな」と聞こえたまへるを、殿御覧じて、源氏「何かは。この君たちのすきたまはむは、見どころありなむかし。もて離れてな聞こえたまひそ。御返り時々聞こえたまへ」とて、教へて書かせたてまつりたまへど、いとどうたておぼえたまへば、乱り心地あしとて聞こえたまはず。人々も、ことにやむごとなく寄せ重きなどもをさをさなし。ただ母君の御をぢなりける宰相ばかりの人

一　玉鬘の御前が、人気もなく。
二　源氏が秘かに恋情を訴える意。
三　以下、玉鬘の苦慮。はっきり拒んで源氏を辱めないのは、源氏の身分や人柄を思うゆえ。
四　玉鬘の明朗で親しみ深い性格。
五　まじめに構えても、やはり可憐な魅力は紛れようもない、の意。
六　かねてより玉鬘に懸想。→胡蝶[4]二一七ページ三行。
七　懸想の年功を積みあげていないのに。役人の勤務年数に見立てた諧謔。→胡蝶[4]二二三ページ一二行。
八　「わびつつも頼む月日はあるものを五月雨にさへなりにけるかな」（花鳥余情）。結婚を忌む月。
九　→玉鬘[4]一七七ページ七行など。
一〇　源氏が返事の文面を。
一一　玉鬘に懸想しながらも蛍宮への返書を勧める源氏を嫌悪。
一二　玉鬘が集めた女房であろう。
一三　母夕顔の父、三位中将（夕顔[1]一五一ページ二行）の兄弟で、宰相（参議）になった人の娘。次ページの「宰相の君」。玉鬘の従姉妹である。
一四　気だてなど悪からぬ人で。
一五　玉鬘が。自ら返事を書かない。

のむすめにて、心[一四]ばせなど口惜しからぬが、世に衰へ残りたるを尋ねとりたまへる、宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかたもおとなびたる人なれば、さるべきをりをりの御返りなど書[一五]かせたまへば、召し出でて、言葉などのたまひて書かせたまふ。[一七]ものなどのたまふさまをゆかしと思すなるべし。

正身は、[一八]かくうたてあるもの嘆かしさの後は、この宮などはあはれげに聞こえたまふ時は、すこし見入れたまふ時もありけり。何[一九]かと思ふにはあらず、かく心憂き御気色見ぬわざもがなと、[二〇]さすがにされたるところつきて思しけり。

〔三〕源氏、蛍火により宮に玉鬘の姿を見せる

殿は、[二一]あいなく、おのれ心げさうして、宮を待ちきこえたまふも、[二二]知りたまはで、よろしき御返りのあるをめづらしがりて、いと忍びやかにおはしましたり。妻戸[二三]の間[二四]に御褥[二五]まゐらせて、御几帳ばかりを隔てにて近きほどなり。いといたう心して、そら[二六]だきもの心にくきほどに匂はして、つくろひおはするさま、親にはあらで、むつ[二七]かしきさかしら人の、さすがにあはれに見えたまふ。宰相[二八]の君なども、人の御答へ聞こえむこともおぼえず恥づかしくてゐたるを、埋[二九]れたりと引きつみたまへばいとわりなし。

一六　源氏は玉鬘に断らず勝手に書かせる。彼女が代筆しなれているので宮は玉鬘の返書と思い込む。
一七　宮の反応に源氏が興味を抱くらしい、とする語り手の推測。
一八　源氏が懸想したこと。前ページ一二行の「うたて」ともひびきあう。
一九　宮に心ひかれたためではなく、源氏の求愛から逃れるための行為。
二〇　源氏を疎みながらも、やはり女らしく宮に情ある態度をとる。
二一　勝手に、一人で心をときめかせ。「あいなく」は語り手の評。
二二　以下、宮。彼は代筆の返書だとは知らない。
二三　妻戸（殿舎の四隅にある両開きの戸）の内側の廂の部分。
二四　宮のために敷物を用意。
二五　几帳だけを隔てた廂に招くのは好意的。簀子でも無礼でない。
二六　室内の薫香。
二七　手に負えないおせっかい者が。語り手の揶揄。→胡蝶④二三〇ページ一〇行。
二八　傍の源氏が、宰相の君に玉鬘の代筆の返書を指図している状態。
二九　ぐずぐずしている、として。

夕闇[一]過ぎて、おぼつかなき空のけしきの曇らはしきに、うちしめりたる宮の御けはひ[二]も、いと艶なり。内よりほのめく追風[三]も、いとどしき御匂ひのたち添ひたれば、いと深く薫り満ちて、かねて思ししよりもをかしき御けはひを心とどめたまひけり。[五]うち出でて、思ふ心のほどをのたまひつづけたる言の葉おとなおとなしく、ひたぶるにすきずきしくはあらで、いとけはひことなり。大臣[七]、いとをかしとほの聞きおはす。

姫君は、東面[八]にひき入りて大殿籠[九]りにけるを、宰相の君の御消息[一〇]つたへにゐざり入りたるにつけて、源氏「いとあまり暑かはしき御もてなしなり。よろづのことさまに従ひてこそめやすけれ。ひたぶるに若びたまふべきさまにもあらず。この宮たちをさへさし放ちたる人づてに聞こえたまふまじきことなりかし。御声[一三]こそ惜しみたまふとも、すこしけ近くだにこそ」など、諫[一四]めきこえたまへど、いとわりなくて、ことつけて[一五]も這ひ入りたまひぬべき御心ばへなれば、とざまかうざまにわびしければ、すべり出でて、母屋[一六]の際なる御几帳[一七]のもとに、かたはら臥したまへる。何くれと言長き御答へ聞こえたまふこともなく思しや

一　「夕闇」は、普通、月の出ない下旬の宵をいう。ここは後に「五日」とあり、四日ごろの、薄雲のかかった淡い光の新月であろうか。

二　以下「けはひ」の語の繰返しに注意。宮も玉鬘も、微光と薫香のなかのほのかな存在として形象。

三　人や物の動きで生ずる風。

四　宮は玉鬘の「御けはひ」を。

五　以下も、宮の行為。

六　「聞こゆ」など謙譲語がないので、話す相手が宰相の君と分る。

七　源氏の関心。↓前ページ四行。

八　母屋の東側。宮のいる「妻戸の間」は、西南の隅か。

九　宮の言葉を伝えるために。

一〇　以下、玉鬘への諫言。夏の暑苦しさになぞらえて、玉鬘が奥に引きこもっている態度を難ずる。

一一　臨機応変にふるまうのが無難。

一二　よそよそしい女房の取次で。

一三　直接返答はせずとも、せめて少し宮の近くまで出ては、の意。

一四　注意するのにかこつけて部屋の中にはいりかねない源氏の気持。

一五　このままでは源氏が近づき、出れば宮に応ずるほかない状態。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com